

# JICA日本語教育ボランティアガイド



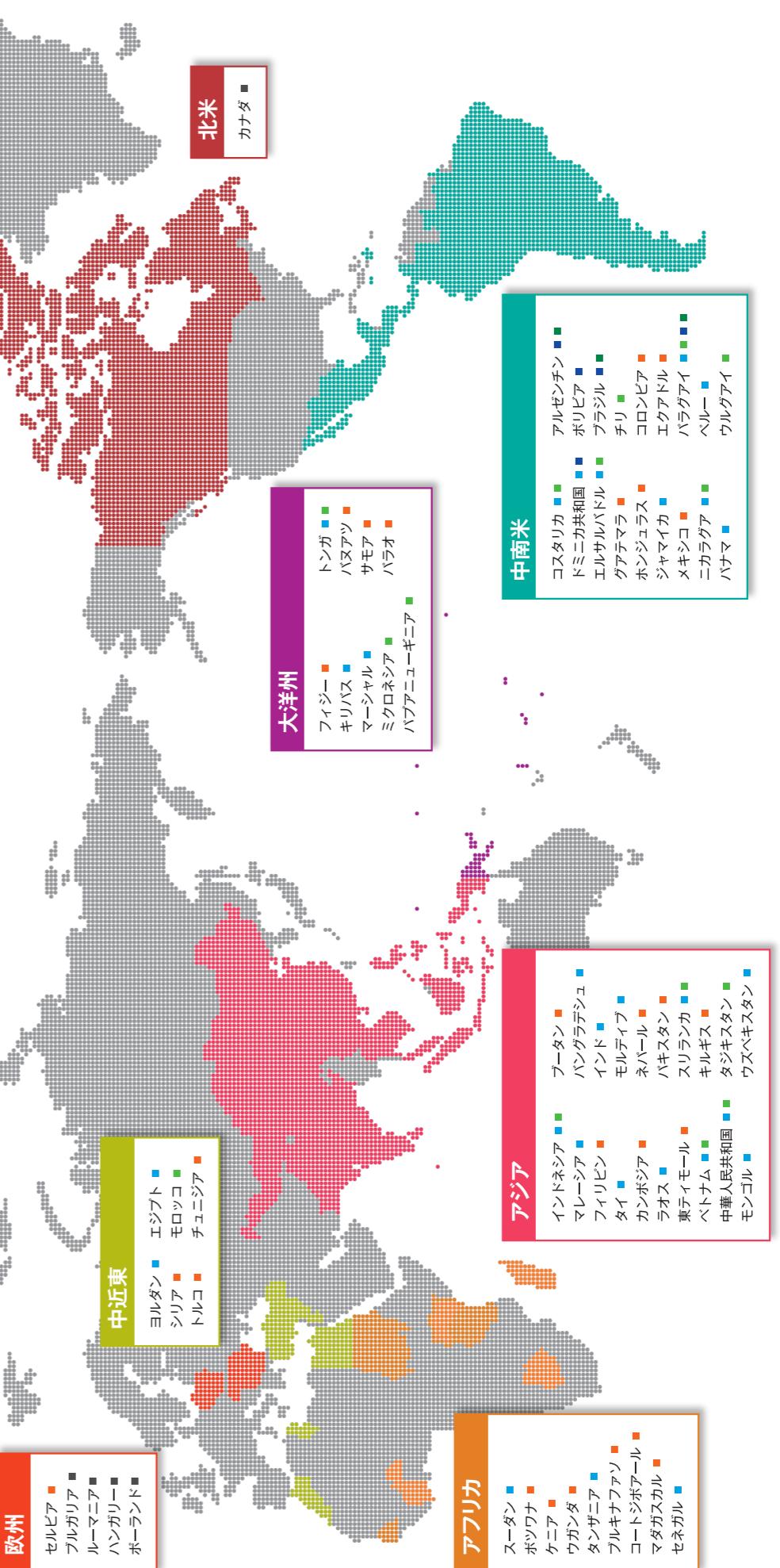
日本を学んだあなたを。  
日本を学びたあなたを。  
日本を育むあなたを。



## JICA日本語教育分野ボランティア活動国

(2015年10月現在)

■派遣実績あり  
■日系社会青年ボランティア  
■日系社会シニアボランティア  
■青年海外協力隊  
■シニア海外ボランティア



JICAボランティアウェブサイト  
<http://www.jica.go.jp/volunteer/>

独立行政法人国際協力機構 (JICA)  
青年海外協力隊事務局 講習課 (JICAボランティアへの応募に関するお問い合わせ)  
青年海外協力隊事務局 日本語教育担当 (JICA日本語教育ボランティアに関するお問い合わせ)

TEL:03-5226-9813  
TEL:03-5226-9848

2015年11月

# 日本語教育ボランティア

JICA日本語教育ボランティアの対象年齢や活動内容は次の4種類に分かれます。

具体的な活動は、募集説明会で配布される「要請一覧」やJICAボランティアウェブサイト「要請情報検索」をご覧ください。



## 青年海外協力隊

応募年齢  
20歳  
~  
39歳

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州	教育機関（小・中・高・大学等） その他の機関（職業訓練校・公開講座）	小学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・仕事で使うための日本語の授業の実施 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州	教育機関（小・中・高・大学等） その他の機関（職業訓練校・公開講座）	小学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・仕事で使うための日本語の授業の実施 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力
日本語教育	中南米（日系社会）	日系団体運営の日本語教育機関	主に日系人（年少者中心）	・配属先での日本語の授業の実施 ・音楽、書道、体育などの指導 ・日本文化関連イベントや学校行事の企画、運営 ・日系団体主催行事等への協力

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日系日本語学校教師	中南米（日系社会）	主に日系人（年少者中心）		

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日系日本語学校教師	中南米（日系社会）	主に日系人（年少者中心）		

応募年齢  
20歳  
~  
39歳

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日系日本語学校教師	中南米（日系社会）	主に日系人（年少者中心）		

応募年齢  
20歳  
~  
39歳

## シニア海外ボランティア

応募年齢  
40歳  
~  
69歳

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州・歐州	学校教育機関（高校・大学等） その他の機関（政府関連機関・公開講座等）	学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・シラバスや教科書の改訂 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・現地の日本語教師の養成支援 ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州・歐州	学校教育機関（高校・大学等） その他の機関（政府関連機関・公開講座等）	学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・シラバスや教科書の改訂 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・現地の日本語教師の養成支援 ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州・歐州	学校教育機関（高校・大学等） その他の機関（政府関連機関・公開講座等）	学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・シラバスや教科書の改訂 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・現地の日本語教師の養成支援 ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力

## 日系社会シニア・ボランティア

応募年齢  
40歳  
~  
69歳

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日系日本語学校教師	中南米（日系社会）	主に日系人（年少者中心）		
日系日本語学校教師	中南米（日系社会）	主に日系人（年少者中心）		

## CONTENTS

### 03 ボランティアの活動紹介

- 03 インド  
青年海外協力隊 川乱 麻里さん
- 05 ウズベキスタン共和国  
青年海外協力隊 瀬戸口 達也さん
- 07 モンゴル国  
シニア海外ボランティア 浮田 久美子さん
- 09 ヨルダン・ハシェミット王国  
青年海外協力隊 中山 裕子さん
- 11 セネガル共和国  
青年海外協力隊 前田 智子さん
- 13 パラグアイ共和国  
青年海外協力隊 石川 苑子さん
- 15 アルゼンチン共和国  
日系社会青年ボランティア 正田 晓子さん
- 17 ブラジル連邦共和国  
日系社会シニア・ボランティア 櫻井 美香さん
- 19 トンガ王国  
青年海外協力隊 鈴木 千咲さん
- 21 バブアニューギニア独立国  
シニア海外ボランティア 鈴木 韶さん

### 23 JICAボランティアに対する JICAの支援制度のご紹介

### 24 JICAナレッジサイト（日本語教育分野） 派遣実績と帰国後の進路のご紹介

### 帰国ボランティア座談会

- 青年海外協力隊 宮越 正史さん
- 青年海外協力隊 太原 徹雄さん
- 青年海外協力隊 木村 佳代子さん
- 日系社会青年ボランティア 鈴木 宏子さん

### 29 応募を考えている人へ JICA日本語教育ボランティア Q&A



こちらから教えるだけでなく、一緒に学び合いながら大きな成長を。



## びっくりインド生活!

赴任国のインド、特にデリーは気候も人も慣れるまで大変でした。毎日のように何かしら問題が起きるので、飽きるということがありません。夏は暑さで鼻血を出し、雨期は毎日浸水して、冬は寒くて眠れず、毎日が修行のようでした。日本に帰りたくなるくらい辛いこともありましたが、すべて自分が成長できるいい経験。インド人の考え方には本当にびっくりさせられますが、赴任から1年以上たった今では、それも生活の一部だと楽しんでいます。



今では楽しい思い出、初めての赴任国で!



日本の大学で勉強するの夢だった生徒が東京大学に合格したとき、「自分のことのよう

配属先は川乱さんが初代隊員、すべてが手探りだった。常に意識したのは、技術補完研修で学んだ「目の前の学習者一人一人を大切にする」ということ。文化や人間関係のスタイルが違つても、相手を尊重してコミュニケーションを密にすることを大切にしている。また、研修で出会った仲間とは、派遣後もSNSなどで交流があり、活動の「こと」や将来について情報を交換し合つていてるという。

「1年目は苦労の連続でした。でも今は、日々生徒の笑顔を見られることがとても幸せです。生徒と接している時が一番樂しいですね。」

一方的に教えるのではなく、一緒に学び合うことの大切さ。

川乱さんはまだ日本食も日本のサブカルチャーも普及していないが、日本の人ことを知りたい、いつか行つみたいといふ生徒は多い。それは川乱さんにとって大きな喜びであり、責任の重さもある。



「授業だけでなく、生徒に実際に日本のものに触れてもらいたくて、できるだけ

派遺国はインド。予想外だったが、それだけに俄然興味もわいてきたという。配属先はデリーにあるブルーベルズ・スクール・インターナショナル。同僚日本語教師1名とともに小学6年生から高校3年生の授業を担当。それに加えて『折り紙クラブ』で小学3年生から5年生に折り紙を教えている。

「授業だけでなく、生徒に実際に日本のものに触れてもらいたくて、できるだけ

授業だけでは教えられないこと、実際の日本文化に触れてほしい。

「赴任当初はみんなシャイで、様子をうかがつてているような感じでした。でも、こちから積極的に声をかけ、話をするようになるとすがり打ち解け、何でも『先生！先生！』と報告してくれるようになります！」

川乱さんが心がけるのは、こちらが方的に教えるのではなく、現地の人と一緒になつてお互いのいいところを学び合いならより良いものをを目指すこと。JICAボランティアという立場で得た多くの出会いは、彼女にとってまさに宝物だ。任期2年にして、その成果は確実に現れてきている。

もつと日本のことを探りたい、そんな生徒の気持ちに応えたい。



海外で日本語を教える夢を、JICAボランティアで現実に。

川乱さんは、大学で日本語教育を専攻。中学生の頃から漠然と、将来は海外で日本語を教える仕事がしたいと思っていた。

4年生の時に大学でJICAボランティアの説明会があり、経験者の話を聞いて具体的に参加を考えるようになったという。

「それまで青年海外協力隊というと、アフリカで井戸を掘つたり砂漠を緑化したりというイメージしかなく、自分とは遠い世界だと思っていました。でも、日本語教師や日系日本語学校教師もあることを知って、初めて身近に感じました。自分も日本語教育ボランティアに参加することで国際協力に貢献し、自分を成長させることができるのではないかと思ったんです。」

途上国での生活は不安もあつたが、O.B.と直接話をし、任地での経験を楽し

そうに語る姿を見て「私もやってみたい」と強く思うようになった。

「そうに語る姿を見て『私もやってみたい！』と強く思うようになった。」

デリーで開かれる日本関連イベントにも連れて行くようにしています。さらに夏休みには、私の休暇を利用して兵庫県の学校へ10日間のスタディツアーリ率しました。また、この学校では行事が多いのが特徴。各国大使館や外国人学校などからゲストを招いて行うイベントが頻繁に行われる。その際は必要に応じて通訳、来賓対応、カメラマン、音響・照明の補助など、教師以外のこと何もでもやる。

配属先外でもデリー近郊の中等教育機関日本語教師会に参加し、2ヶ月に一度集まつて現地人の先生とアクティビティをシェアしたり、一緒に問題点を考えたり、課外の活動にも積極的に参加している川乱さんだ。



青年海外協力隊  
平成24年度2次隊  
**川乱 麻里**  
Mari Kawamidare

大学で日本語教育を専攻し、卒業後オーストラリアで日本語のティーチング・アシスタントを経験。帰国後、中学時代から希望していた海外での日本語教師になるため青年海外協力隊に参加。





海外で改めて感じた、人との繋がりの大切さ。

日本語教育で新たな絆を創りたい。

どんな経験も人生の糧になる。  
そんな思いでJICAボランティアに。

「海外で日本語を学んでいる人たちに、現地へ赴いて直接教えてみたい。」  
日本で約2年間、日本語教師として働いているうちにそう考えるようになった、という瀬戸口さん。そのときにちょうど見つけたのが、JICAボランティアの募集広告だった。

「海外での生活経験はありましたが、途上国では行ったことがなかったので不安はありませんでした。どんな生活が待っているのか、想像もつかなかつたです。しかしそういった経験も今後自分の人生の糧になるかもしれません」と思い、応募に踏み切りました。

とはいってもまだ日本語教師としての経験が浅かつたので、面接時には、留学や転職経験で培った環境対応力や生活適応力をアピールした。それが功を奏し、見事JICAボランティアへの道が開けたのです。

**どうせなら全く知らない国へ。  
期待に胸を膨らませた海外派遣。**  
瀬戸口さんにとってウズベキスタンは第3希望の国だった。  
「国を選ぶにあたり、どうせなら今まで全く知らなかつた国へ行ってみたい」という気持ちがあつたんです。中央アジアは、自分にとっては未知の国。でも、不安よりも期待のほうが大きかったですね。」

任地のタシケントはウズベキスタンの首都であり、地下鉄やバスなどの公共機関

一員だ。

「先輩隊員が6代にわたって築いてくれたものも多いので、その財産をなるべく崩さないよう努めています。それに加えて、授業開始の号令や試験時のルールなど、なるべく日本の授業スタイルを取り入れるよう、私なりに工夫もしています。」

こうした代々の協力隊員のアイデアの積み重ねが、この配属先での日本語教育をさらに内容の濃いものに進化させている。

瀬戸口さんの誕生日、学生たちからののプレゼント、プレゼントだった。

「赴任して一番うれしかつた出来事で、ここに来るまでは、想像もしていませんでした。そして、今の日本に減りつつあります。日本ではあまり知られていない国でも、こんなにたくさんの人たちが日本に興味を持ってくれていて、日本語を勉強してくれることに感動しましたね。」

ある朝、大学に行ったときのこと。教室に入った途端に学生たちが日本語で「ハッピー・バースデー」を歌ってくれた。

瀬戸口さんの誕生日、学生たちからののプレゼント、プレゼントだった。

「赴任して一番うれしかつた出来事で、ここに来るまでは、想像もしていませんでした。そして、今の日本に減りつつあります。日本ではあまり知られていない国でも、こんなにたくさんの人たちが日本に興味を持ってくれていて、日本語を勉強してくれることに感動しましたね。」

## 瀬戸口先生ってどんな人？

### 瀬戸口先生の印象は？

優しくて、楽しい先生です。毎日、大学のために一生懸命活動してくれています。

### どんな活躍をされていますか？

少しでも日本語が上手になるよう、日々興味深い授業や文化イベントを行っています。いつも楽しくて面白い授業は、学生たちからも好評ですね。

### 学校や授業はどう変わりましたか？

学生たちの日本や日本語についての興味がとても強くなりました。日本語を勉強したいという学生がとても増えています。



### 印象に残っている授業やイベントは？

ステージで学生と一緒に、日本語とウズベク語で日本の歌を歌いました。日本の料理も一緒に作りました。寿司は知っていましたが、この時はたこ焼きも作りとてもおいしかったです。



**どうせなら全く知らない国へ。  
期待に胸を膨らませた海外派遣。**

瀬戸口さんは第3希望の国だった。

「国を選ぶにあたり、どうせなら今まで全く知らなかつた国へ行ってみたい」という気持ちがあつたんです。中央アジアは、自分にとっては未知の国。でも、不安よりも期待のほうが大きかったですね。」

任地のタシケントはウズベキスタンの首都であり、地下鉄やバスなどの公共機関

一員だ。

「先輩隊員が6代にわたって築いてくれたものも多いので、その財産をなるべく崩さないよう努めています。それに加えて、授業開始の号令や試験時のルールなど、なるべく日本の授業スタイルを取り入れるよう、私なりに工夫もしています。」



こうした代々の協力隊員のアイデアの積み重ねが、この配属先での日本語教育をさらに内容の濃いものに進化させている。

瀬戸口さんの誕生日、学生たちからののプレゼント、プレゼントだった。

「赴任して一番うれしかつた出来事で、ここに来るまでは、想像もしていませんでした。そして、今の日本に減りつつあります。日本ではあまり知られていない国でも、こんなにたくさんの人たちが日本に興味を持ってくれていて、日本語を勉強してくれることに感動しましたね。」

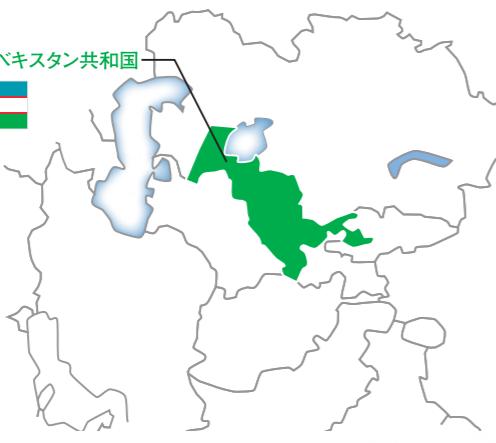
ある朝、大学に行ったときのこと。教室に入った途端に学生たちが日本語で「ハッピー・バースデー」を歌ってくれた。

瀬戸口さんの誕生日、学生たちからののプレゼント、プレゼントだった。



青年海外協力隊  
平成24年度3次隊  
**瀬戸口 達也**  
Tatsuya Setoguchi

大学を卒業後、日本語教師として国内の日本語学校に2年間勤務。海外で日本語を教えたいたいという思いから青年海外協力隊に応募し、ウズベキスタン国立世界言語大学で活動。



人と人との繋がりの重要性を改めて感じさせられました。

ウズベキスタンでの体験が、瀬戸口さんのこれまでの人生に重要な役割をもたらすことは間違いない。

この大学へは、瀬戸口さんで既に7代日本人の受け入れに慣れているので、最初から歓迎ムードだった。「日本に興味のある学生が思った以上に多く、配属当初から日本や日本文化についての質問が絶えませんでした。日本に対して、とても良いイメージを持つてくれているなど感じました。」赴任当初はやはり日本の大学と違うところが多くあり、慣れるのに少し時間がかかましたが、今ではすっかりこの大学の忙な日々だ。

**協力隊員のアイデアの積み重ねが、大きな財産に。**

この大学へは、瀬戸口さんで既に7代日本人の受け入れに慣れているので、最初から歓迎ムードだった。

配属先の世界言語大学はその名の通り、言語に特化した国立大学。その中で第2外国語として約150名の学生が日本語を学習している。活動内容は、週6日24コマの授業を同僚と分担。その他に学内での日本文化イベントの企画、運営。学外でも、日本語教師会の活動を行う多忙な日々だ。



撮影 Kazuki Yasuda



# 行政機関の内側から改革を。ボランティアの力が、国の教育を変えるかもしれない。



のぞいてみよう! JICAボランティア

浮田さんの、いきいきモンゴル生活!



毎日、体を動かすようにしています。毎朝のヨガとピラティスの習慣で、この極寒の地でも風邪知らず。12時前には寝て、質のいい睡眠をとるようにしています。仕事は遅くなってしまっても職場で終わらせ、家や休みの日に持ち込まないように、オンとオフのメリハリをつけています。休日やプライベートの時間は、友達と食事をしてお酒を飲んだり、体をよく動かしたり、部屋の掃除をしたり。頑張った自分には、まめにご褒美をあげています。



3ヵ国目となる教育の現場で、浮田さんは赴任前に言われた言葉を大切にします。

「国の行政機関である教育局で仕事ができるという貴重な機会を活かし、有意義な活動をしてほしい。」

大きな視野で考えることを常に念頭に置き、さまざまな改善をしてきたからこそ、モンゴル政府認定の教科書を作成という大きな仕事にも着手することができた。

「このような仕事ができるのは、JICAボランティアとして行政機関に派遣されたからです。私たち日本語教師が世界の国々に派遣されるには、必ずその理由があります。それを認識していることが重要だと思っています。」

任期終了後の浮田さんの夢は、再びモンゴルに戻ってくることだという。

今作成している教材を使って、実際に自分で授業をしたいです。一度海外で

## 一人のボランティアの活動が、この国の教育を変える力になる。

極寒の地。日本の生活とは全く違う。今年は防寒対策をしっかりとるので、あまり問題は感じませんでした。どんな環境にも自然と馴染んでくるものですね。」

足りないものがあつて当たり前の日常だからこそ、充足したときのありがたさは格別だ。そもそもJICAボランティアに応募しようと思ったのは、サモアの旅行で物質的な豊かさより、心の豊かさを大切にしたいと思ったから。今ではそんな自分に、少し近づいたように感じている。

日本語を教える体験をしたら、本当にやめられなくなってしまうほど楽しいんですよ。」

「一人のボランティアの地道な活動が、モンゴルの子どもたちの将来を変えるかもしれない。」



シニア海外ボランティア  
平成24年度1次隊

**浮田 久美子**  
Kumiko Ukita

大学院を卒業後、日本語教師養成講座を終了し、青年海外協力隊としてJICAボランティアに参加。3度目の派遣で、シニア海外ボランティアとしてモンゴルの教育局に派遣。



浮田さんはすでに、3度目のJICAボランティアだ。最初に応募を考えたのは、サモアへ旅行したときのこと。ここで現地の協力隊員に出会ったのがきっかけだった。でも海外で働きたいと思いましたね。」

「そのとき、たまたま日本で個人的に友人に日本語を教えていて、とても面白かったんです。日本語教師になつてすぐにも海外で働きたいと思いましたね。」

帰国後、浮田さんは早速、日本語教師養成講座に通い始めた。養成講座修了後、青年海外協力隊に応募し、そして合格。「まず1度目のベトナムで、海外で日本語を教える楽しさにすっかり取りつかれてしまつたんです。」という浮田さん。2度目は、短期ボランティアとしてミクロネシアへ。さらに3度目は、シニア海外ボランティアとしてモンゴルの教育局に派遣されることになった。

**自作の教材を使う  
子どもたちの笑顔を、  
仕事の大きなエネルギーに。**

浮田さんが携わる業務は多岐にわたる。「まず、日本語教材の作成。今は各学校で違う教科書を使っているので、スタンダードを作り、それに準拠した教材にしたいんです。さらに、初中等教育機関の日本語教師を対象とする勉強会の開催。巡回指導では10校を巡り、ときには日本文化を紹介することも。他にも学校の日本語行事のお手伝い、日本語能力試験、スピーチコンテストなどの運営支援を引き



元々海外旅行が好きだったが、旅行と実際に生活するのとでは大違った。「現地の人と同じ目線で生活すると、一介の旅行者では見られないものが見えてくるのが面白いんです。」

**物質的な豊かさよりも、心が豊かになるモンゴルの暮らし。**

日本では当然あったものが、当たり前でないことが多い。授業に取り組む姿を見ると、よし、また頑張ろう!という気持ちになりますね。」

モンゴルの子どもたちの笑顔が、浮田さんの仕事への大きな励みとなっている。





のぞいてみよう! JICAボランティア

タイムール・ハンドーク先生からのメッセージ!

## 中山先生へ

学生たちは、中山先生の笑顔が大好きです。仲間として愛され、教師として尊敬され、日本語を学ぶ味方として絶大な信頼を得ています。私にとっても中山先生は、同僚としてだけでなく、困ったときに何でも相談できる頼りになる友人。先生をサポートする役割の私が、いつもサポートされています。



新しいことに恐れず挑戦するのが中山先生の素晴らしいところ。学生が喜ぶイベントをいつも考えています。歌やゲーム、さまざまなツールや工夫で、学生たちに日本語で話す自信を持たせる努力をしています。アニメやJ-POPなど、学生が好きなものを自ら調べて授業で使うことも。楽しく日本語を学ぶことを、常に大切にしています。

**まずは何でもやってみること。  
可能性は無限に広がっている。**

「今、本当にいろんな経験をしています。ヨルダンには日本語教師が3名しかいないので、国全体の日本語教育に関わっている実感があります。日本人から見たヨルダンの良さを伝えていくのも必要なことだと感じたくなりました。」

青年海外協力隊  
平成24年度1次隊

中山 裕子

Hiroko Nakayama

大学の文学部を卒業後、旅行会社に勤務。国内の日本語学校で約1年、非常勤講師として勤務の後、青年海外協力隊としてヨルダンへ。



**大学と一般の日本語公開講座、多忙な毎日でもやりがいは2倍!**

「アハラン・ワ・サハラーン!」アラビア語で、ようこそー学生たちからの第一声だ。配属先は、首都アンマンにある国立ヨルダン大学の外国語学部。ネイティブの日本人教師はJICAボランティアしかないので、中山さんは大歓迎された。

でも挑戦する。カラオケ、習字、お好み焼き会や運動会。時には日本のアイドルグループのダンスを踊ったり、日本人とアラブ人の交流イベントを開催したり。今までいろんなイベントを企画してきた。

「イベントでは、できるだけ学生を巻き込んで開催するようにしています。学生たちには受け取るだけではなく、自分から何かを人に提供する体験をしてほしいんです。」

という中山さん。他大学が開催したジャパンデーに大使館と一緒に参加した際には、浴衣の着付けを担当したが大好評で、最後は学生同士で着付けをしているのを見て驚いたといふ。

「大変でしたが、学生が中心となつてイベントを楽しんでいることに感動しました。言葉や宗教は違つても、お互いをもっと知って、お互い好きになつてもらえたなら嬉しいです。」

にはまだまだ、日本語を勉強したい人がいる。そんな人たちに日本語を学ぶ機会を提供し、日本人との交流の場を広げていくこと。国際交流を通して、自國を知る機会を増やしていくこと。それが、中山さんの目標だ。

「日本語を教えるだけではないのが、日本語教師。スポーツでも、茶道でも、アニメでも、やりたいことは何でもやってください! JICAボランティアだからこそできることがあります。」

応募を考えている人へ、力強いメッセージをくれた中山さん。可能性は無限に広がっている。

授業の最初は、いつも日本の音楽を聴く。前任者からのアイデアだ。日本の文化紹介のきっかけにもなる。授業中はなるべく日本語を話すようにしているが、時にはアラビア語も使う。

「私の下手なアラビア語で学生たちも安心しますし、私もアラビア語を頑張るからみんなも日本語を頑張って! という、お互いに励まし合える関係を作りたいんです」。

そして、楽しそうなことには何

お互いをもつと好きに。  
なるために。  
活動の可能性は  
無限大。

「日本に来る外国人の人たちは、どのように日本語を勉強しているんだろう?」  
ずっとそんな興味を持ちながら、国内の日本語学校で働いていた中山さんが青年海外協力隊への参加を決めたのは、東日本大震災がきっかけだった。

「日本人の自分が何もできないのに、遠く離れた国から日本を心配してくれる人がいる。はるばる助けに来てくれた人たちがいる。それに驚き、感謝でいっぱいになりました。そんな気持ちを伝えたいし、もう日本を知ってほしいーと思つたんです。」

合格後中山さんは福島県の二本松訓練所での訓練に参加。しかし、こんな時に日本を離れて良いのだろうか、という迷いもあった。

「そこで出会った仮設住宅の方々が、『遠い国で大変だろうけど、私たちは元気だよって伝えてきてね』と言つて、励ましてくれたんです。その言葉を聞いて、悩んでいる場合ではないなと思いました。」

できることは何でもやり、日本を伝えていこう。中山さんが決意を固めた瞬間だった。



大学の他に、一般向けの公開講座

でも教えている。こちらは、趣味と

して日本語を学ぶ

子どもから大人まで熱心な学習者が多い。大学との掛け持ちで、教材作

りからイベントの企画まで非常に多忙だが、その分やりがいも大きい毎日だ。



**言葉や宗教の壁を越えて、  
お互いをもつと好きになりたい。**

「その期待に応えようとして、最初は授業でもプライベートでも頑張り過ぎてしまつて。逆に疲れて、ふさぎ込んだ時期もありました。でも、時間が経つにつれて自分のペースで付き合えるようになりましたね。」



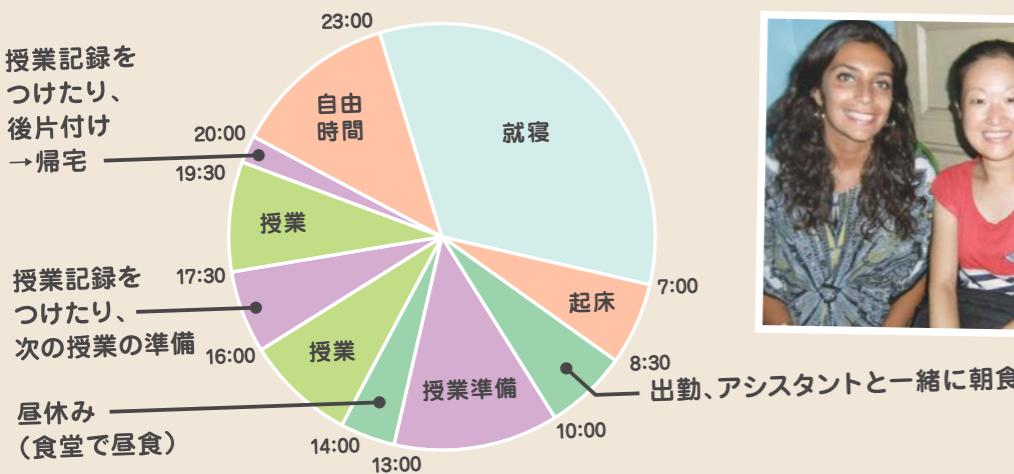
世界中

どこの国であつても、  
教えながら、  
互いに成長できる  
教育環境を。



のぞいてみよう! JICAボランティア

前田さんの、のびのびセネガルライフ!



休日やプライベートの時間は、市場に散策に出かけたり、セネガル人の家へ遊びに出かけます。朝から晩まで、一日一緒に過ごすことが多いですね。たまたま街を歩いていて知り合ったセネガル人家族と一緒に地図を見るのも、ここでも実地訓練しています。

所がどこで  
教える場  
所がどこで  
教える場  
活動を増や  
していきたい  
と思います  
ね。」



**教える場所がどこであつても、  
学生のことを考えられる教師に。**

「まだセネガルには赴任したばかり。これからいろいろやりたいことはあります

が、前任者が行っていたように、学生たちが楽しめるイベントを取り入れながら、周囲のサポートが前田さんにとって大きな心の支えとなっている。



れでもやはり授業は楽しい。  
「学生たちに癒されています。私にとって

は、彼らが教師になるときがあるんです。私のフランス語はまだ拙いですが、それを助けてくれるのはいつも学生。教え

つつ、学びつつ、お互いに成長していく環境は本当にありがたかったです。」

また、すぐに相談のつてくれる上司や

アシスタントなど、学校には協力者も多い。

周囲のサポートが前田さんにとって大きな心の支えとなっている。

**初対面でも歓迎してくれた、  
セネガル流のおもてなし。**

前田さんがセネガルに派遺されて6ヵ月(2014年1月時点)。

「セネガルは第二希望。子どもも、成人、学生など、いろんな学習者と学べることに惹かれたんです。でも、国の場所など

は知らず、決定後にあわてて調べたほど

日本語を教えていたが、もっと本気で日本語を教える環境に浸かってみたいと思い、JICAボランティアへの参加を考えようになつたという。

**初対面でも歓迎してくれた、  
セネガル流のおもてなし。**

翌年には、マレーシアの中等教育機関で日本語を教える機会に恵まれた。

「そこで得た経験はとても貴重なものでした。日本語を教えることになります興味がわきましたね。」

帰国後は、趣味やボランティアとして日本語を教えることにますます本語を教える環境に浸かってみたいと思い、JICAボランティアへの参加を考えようになつたという。

大学院修了後、一般企業に勤務したが日本語教師を諦めきれず、2010年に退職。

翌年には、マレーシアの中等教育機関で日本語を教える機会に恵まれた。

「そこで得た経験はとても貴重なものでした。日本語を教えることになります興味がわきましたね。」

日本語を教える環境に浸かってみたいと思い、JICAボランティアへの参加を考えようになつたという。

**自分の国をもっと世界に伝えたい!  
それが日本語を教えるきっかけに。**

前田さんは、大学2年のときにメキシコに留学。そこで日本語を学ぶ学生に出会つたが、自國のことをうまく伝えられず、思い立ち、大学院への進学を決めた。

「日本の小中学校で、日本語を母語としない子どもたちの支援に関わりました。それがとても面白く、やりがいを感じてしまつて。」

前田さんは、大学2年のときにメキシコに留学。そこで日本語を学ぶ学生に出会つたが、自國のことをうまく伝えられず、思い立ち、大学院への進学を決めた。

帰国後に日本語教師養成講座を受講した。そこで本格的に日本語教育を勉強したいと思いました。それがとても面白く、やりがいを感じてしまつて。」

日本語教師を諦めきれず、2010年に退職。

翌年には、マレーシアの中等教育機関で日本語を教える機会に恵まれた。

親しいセネガル人家族ができ、一緒に食事したりしています。セネガル人には『テランガ』、日本で言うおもてなし精神があり、初対面でも歓迎してくれるのがうれしかつたですね。」

まだ生活環境の違いに驚くことも多いが、それが日々の刺激にもなつていて。最近は、近所に親しいセネガル人家族ができ、一緒に食事したりしています。セネガル人には『テランガ』、日本で言うおもてなし精神があり、初対面でも歓迎してくれるのがうれしかつたですね。」

学校があるのは、セネガルの首都ダカールでも賑やかな場所。学生は西アフリカ各国から来ており、学校内での共通語はフランス語を使用している。しかし、一歩外に出ると、現地で使われているウォロフ語が必要になります。

でもウオロ

フ語が話せ

るウオロフ

語が必要

に

です。

最近

に近づ

きやす

い

人

に近づ

きやす

い

い



**教えつつ、学びつつ、  
お互いに成長していく環境。**

配属先であるアフリカ高等経営センターに日本語教師は前田さんしかおらず、一人ですべての授業を担当。学生募集、時間割作成、イベントの実施まですべて自分でこなす。日々の授業は1日2時間、1セッション40時間。日本語は選択外国語であるため、学生にやる気があつても他の授業が忙しくなると出席できないことも。学生が来なくて落ち込むこともあるが、そ

学生のことを考えられる教師でありたい、と前田さんは言う。西アフリカの学生が日本に行く機会はほとんどないかも知れないが、それでも、決して手を抜くことはない。いくら日本語を勉強しても使わないこと忘れていくものだし、繰り返しあっていくしかないのだ。

「ときには『まあ、いつか』くらいの気持ちで、気楽にやっていく方がいいのかもしませんね。あまり気張らず、学生の要望にこれからも応えていきたいと思っています。」

前田さんの活動が、日本とアフリカの新たな縊を結んでいくのかもしれない。



**青年海外協力隊  
平成25年度1次隊  
前田 智子  
Tomoko Maeda**

大学卒業後、大学院では日本語教育学を専攻。自分が帰国子女であることから、日本の学校に在籍する日本語を母語としない子どもに興味を持ち、日本語支援がライフワークに。



のぞいてみよう! JICAボランティア 石川先生へ!

## 生徒たちからのメッセージ!

石川先生の印象は?

親切で明るく、とても面白い人です。日本がますます好きになりました。

どんな活躍をされていますか?

インターネットやCDなども使って、いろんな日本語を教えてくれます。日本語クラスの新聞を書いたり、おいしい日本料理の作り方も教えてくれます。

学校や授業はどう変わりましたか?

日本人の先生は石川先生だけです。だから、日本語の教え方がすごくわかりやすくなつたと思います。授業も楽しく、また面白くなりました。

印象に残っている授業やイベントは?

ひな祭りや七夕など、日本のすべてのイベントです。日本料理と一緒に作つたのが、とても楽しくて素敵な経験になりました。



この国のために何かをしたい。けれど気がつくと、自分が得たものの方が多かつた。



**自分が一体何を得たのか、答えは数年後の未来にきっとある。**

「ボランティアに参加する前は、派遣国の人たちのために何かをしたいと思つていました。でもパラグアイのために私が何かをしたのではなく、してもらつたのは私だったような気がします。」

「日本のマンガやアニメが好きで、日本語に興味を持つた学生がほとんど。その人気には驚きましたね。最初、パラグアイ人はシャイな人が多いように思いましたが、時間を重ねていくごとにとても人懐っこく、日本語や日本が好きでたまらないということが伝わってくるようになりました。」

石川さんは、前任者が残してくれたノートなどを参考に日本語を教えるだけでなく、日本料理クラスや書道も授業内で行う。他国に派遣されている日本語教育ボランティアとも、メールやブログで活動状況などを情報交換しながら、お互いに励まし合っている。

「いつか日本へ行きたい、日本で勉強したい」という学生がたくさんいます。そんな彼らに、もっともっと日本のことを知つてもらいたいですね。」

**何をするにものんびりペース、まずその国の当たり前を受け入れる。**

東南アジアや大洋州を希望していた石川さんにとって、パラグアイは予想外の任地。夏には40度を超える日もあり、陽射しも強いので、赴任してから肌がかなり黒くなつてしまつた。お国柄はとにかくのんびり、どんなときも焦ることがない。

「仕事でもゆっくりとしたペースに当ちは全く慣れず、一人でイライラしていました。日本での当たり前が、パラグアイでは当たり前を受け入れる。

「日本語を希望していたJICAボランティアが派遣されていましたが、特に日本人が珍しいといった反応はなかつた。それでも、石川さんが来てから日本語を勉強し始めた学生たちの大半は、これが初めての日本人との対話だつた。」

石川さんは、パラグアイで出会つた人たちを通して、日本の良いところをたくさん見つけることができ、そして良くないところも見えてきたという。そのうえで、もっと日本を知りたいと思うようになりました。

「2年間で自分が一体何を得たのか、今はまだ活動中なのでわかりませんが、最後の最後まで考えてみたいと思います。」

帰国後は、日本語教育のみならず、日本に暮らす外国から来た人たちの力になれる活動をしたいという石川さん。彼女が得たものが何なのか、その答えがきっとそこにあるに違ひない。



青年海外協力隊  
平成24年度1次隊

**石川 苑子**

Sonoko Ishikawa

大学で日本語教育を専攻。卒業後は民間企業で働きながら、週に一度、日本語指導の支援を行う。3度目の応募で青年海外協力隊としてパラグアイへ派遣。



日本語を学ぶ学生たちとともに、新しい一步を踏み出したい。



以前ではないんです。でも今は、この国の当り前を少しずつ受け入れられるようになりましたね。持ち、姿勢次第

石川さんは、高校生の頃から青年海外協力隊に興味があり、いつかは参加してみたいと考えていた。中でも、日本語教育ボランティアには特に関心があった。

「大学で日本語教育を専攻し、多くの留学生と関わる中で流暢に日本語を話す友人たちに驚き、彼らのような日本語を学ぶ学生たちの第一歩を一緒に踏み出せたから素敵だなと思つたんです。また、身近に日本語教育ボランティアの経験者がいたことも大きかったです。」

大学卒業後、民間企業で働きながら、週末はボランティアで日本語を教えていた。青年海外協力隊へはそれまで2度応募し、いずれも不合格だったが、諦めずに3度目の応募。面接では素直に自分の意見を伝えることを心がけた。そして見事合格。石川さんの熱い気持ちが、海外での日本語教師という道を開いていった。

**日本が大好きな学生のために、もつともっと楽しめる授業を。**

現在、14歳から40歳くらいまで計60名程度の学生が日本語を学んでいる。



ただ気づくことができたんです。配属先は、「パラグアイ・日本人造センター」。25年前に日本の無償資金協力によって建てられた多目的文化センターだ。ここでは語学、ダンス、体操、音楽などいくつかの部門があり、その中の語学部門で主にパラグアイ人に日本語を教えている。また、日本の季節ごとの行事に合わせて、授業とは別に小さなイベントも開催。年に一度行われるスピーチコンテストや日本語能力試験の支援も行う。

行事に合わせて、授業とは別に小さなイベントも開催。年に一度行われるスピーチコンテストや日本語能力試験の支援も行う。

日本語を学ぶ学生が日本語を学んでいる。



協力隊員という立場だからこそ  
見えてくるものがある。

# 「日系社会」の 子どもに伝えたい、 日本人としての 誇りと文化。 JICAボランティア だからこそ できる教育を。



## ちびっこバザー

20年前、近隣校に派遣されていたシニアボランティアが導入したイベント。日本語を使って買い物ごっこをする、という年1回開催される行事です。小学校高学年・中学生や父母が店員の役、幼稚園生・小学校低・中学年がお客様役をし、手作りのゲームや父兄からの寄付で集めた衣類・おもちゃなどを商品にして、おもちゃのお金で買い物の練習をします。普段の授業では恥ずかしがって日本語を話そうとしない子どもたちも、その日は積極的に日本語を使おうとします。日系の父母も日本語に触れ合う機会が少ない昨今、日本語を介しての親子間のコミュニケーションにも役立っているようです。



「子どもたちの成長を感じられた時は本当にうれしいですね。学習発表会で練習以上の成果を出したり、学校生活でも、あまり泣かなくなったり。赴任以来彼らの成長を実感できる瞬間はたくさんあります。生徒たちのやる気が、私のモチベーションになっています。」

### 将来の日本語教育を担う 先生のために、今できること。



なついて準備等は大変ですが、子どもたちはかわいく、成人はやる気があつて授業は常に活気がありますね。毎日が楽しいです。」「2つ目は、日本文化関連の活動。工作や、遊戯や習字などの文化指導と、入学式・卒業式・運動会・学習発表会・バザーなど学校行事の準備や参加だ。そして3つ目が、先生方との勉強会。教科書の分析や、指導が難しい文法項目に関する講義、また、巡回指導先で新人教師対象の基本的な指導法の講義を行っている。

「仕事の内容も多く、まだまだ失敗の連続ですが、同僚の先生にアドバイスをいただきながら試行錯誤でやっています。」「自分よりキャラクターが長い先生が多く、日本語のレベルも想像以上に高かったことで、赴任当初は自分に一休何ができるか悩んだ時期もあった。だが、同僚が苦手とする箇所もわかり始め、それらを勉強会で取り入れているという。」



日系社会青年ボランティア  
平成24年度派遣

### 正田 晓子

Akiko Masada

大学のブラジル・ポルトガル語学科を卒業後、国内の民間日本語学校で約2年間勤務。海外では、ベトナム、シンガポールの民間日本語学校、さらに青年海外協力隊としてフィリピンの大学で活動した経験を持つ。



話を聞いたり、  
日系人の海外  
移住の歴史に  
ついても自分  
なりに調べた  
という。

正田さんのJICAボランティアへの参加は、今回で2度目。前回は青年海外協力隊の日本語教師隊員として、フィリピンの大学に赴任していた。そこでは、日本語教師としての技術を磨くことにも増して、信頼関係を築くことの難しさを感じ。相手のやり方を尊重しながら活動を進めていく中で、日本語教師隊員としての大きなやりがいを感じることができたといふ。

「フィリピンでは、配属先や他機関の文化イベントで、主催者の協力を得て、イベントのインターミッションとしてよさいいや阿波踊りを披露しました。現地の人々に日本文化に触れてもらうこと、興味をもってもらうことができたのではないかと思っています。2年という短期間ではあっても、隊員という立場だからこそできることがあり、見えてくるものもあると思いましたね。」

新たな活動を通してさらに視野を広げ、日本語教師として成長したい。そんな思いで応募した、2度目のJICAボランティアだった。

### 日本語教育に熱心な同僚 互いに高め合う関係へ向けて

今回は、日系社会青年ボランティアとしての参加だ。前回と異なり、現地日系社会の子弟が主な教育対象になる。日系社会に関する知識はあまりなかったのでOBに

力をいれている正田さん。彼らは熱心に参考してくれている。「毎回の準備は楽ではありませんが、アルゼンチンの日本語教育の将来を担うかもしれない先生方の役に少しでも立てるとは、大きな喜びですね。」「日系社会」という特殊な環境下で、いろいろな人に出会い、さまざまな価値観を尊重することの大切さを学んだ正田さん。2度のボランティア経験を通じて、今大切に生きることの重要さを学んだという。彼女のこれから、日本語教師としての活躍が楽しみだ。

ここでの正田さんの主な仕事は3つある。1つ目は生徒への直接の日本語指導で、日系子弟のクラス、日本語能力試験対策コース、アルゼンチン人（非日系）成人のクラスを担当している。「それぞれ学習目的や年齢が異

### 常に活気のある授業、 同僚とともに試行錯誤の毎日。



「大学でポルトガル語専攻だったのでブラジルを希望していたのですが、今はアルゼンチンで良かつたと思っています。この国の日本語教育は歴史が古く、レベルも意欲もない先生が大勢います。教師としての技術向上に努めながら、現地の先生と共にできるものを見つけたいですね。」

気候は日本と同様に四季があり、自然も豊か。人々は良く笑い、ゆったり生活を楽しんでいる。この街の日本人会が運営するブルサ「日本語学園」が、正田さんの配属先だ。日系の父母たちの熱心な思いで61年前に設立され、現在生徒は日系子弟（子供）約90名と、アルゼンチン人（非日系）成人約50名が在籍している。



# 貴重な体験。頭で覚えた知識を、肌で実感できた。



## 生徒たちへ

私は生徒に教える立場ですが、逆に助けられている、教えられることが多いですね。生徒たちはみんな、「自分を成長させようとする気持ち」「学校に何かを求める気持ち」を強く持っています。そんなヤル気に満ちた生徒にいつも助けられて、私も前向きな気持ちで授業をしています。みんな、ありがとう!



## 同僚の先生たちへ

最初は、言葉が不自由なので、アパート探しからバスの乗り方まで、助けられことばかりの毎日。最近は生活にも慣れてきましたが、電気製品の修理依頼の電話など、未だに複雑なことは助けてもらっています。生活以外にも、仕事の流れや様子がわからない時には、よく質問して教えてもらっていますね。同僚の皆さん、ありがとうございます!



日本とブラジルの文化の違いを、自分自身の目で見たかった。

外国语、特にブラジル人の多い街、愛知県豊橋市の中学校で、国際学級の教員として勤務していた櫻井さん。それ以前には、南米コロンビアでJICAボランティアの日本語教師としての活動経験もある。

「ブラジルから日本に働きに来る家族の子どもたちについては、ある程度のことは知っているつもりでした。それでも、現場に入つてみるとまだまだ多くの問題があります。教育に対する関心の薄さ、不登校、進路の問題、文化の違いからくる誤解……。そんな問題に接するうちに、実際に生徒たちの母国に渡つて、日本とブラジルの違いをもっと深く学びたいと思ったんです。」

もう少し日本で、実績を積んでからでもいいのでは。そんな助言もあつたが、自分自身の目で見ないと納得できないことも数多くあつた。コロンビアでの経験から、ラテンアメリカの子どもたちの力になりたい、という気持ちが人一倍強かつたのだ。

時に戸惑い、時に励まされた、  
ブラジル独特の日系社会。

今回は日系社会シニア・ボランティアとして、2度目のJICAボランティアへの応募を決意。見事合格し、希望通りブラジルへの派遣が決定した。

「南米経験もあり、任地の気候や生活にはすぐにと

わかつていたことを、肌で実感できたのだ。最も大きかったのは、失敗を繰り返し、悩んだり人に助けてもらう中で、ありのままの自分を認められるようになつたこと。日々、喜びがあれば苦しいこともあります。感激することもある。そのような学びを通して、人間性が磨かれるのがJICAボランティアだ。今回の活動は櫻井さんにとつて、生徒に日本語を教えるだけではなく、自分の価値観を再発見する大きなチャンスにもなつた。これからJICAボランティアを目指す人たちにも、新たな自分を創造し、人間としての幅を広げてほしいと櫻井さんは願っている。

一人で解決できない問題も、  
ブラジル流の大らかさで乗り越える。

この地区のボランティアは、櫻井さんで6代目。代々行ってきた研修会やお話大会、習字や歌の指導、さらに遠足や運動会などのイベントも引き継ぐ形となつた。また、独自に考えたのは、震災にあった子どもたちにクリスマスカードを送る活動や、地区の学校の交流会。イベントを盛り上げるために、お話大会での応援団も結成した。



け込むことができました。でも、いちばん苦労したのは日系社会です。同じ南米でもブラジル人の先生に教わって、何世代にもわたつて築いた独特的の日系文化がある。それに慣れるのに時間がかかるのだ。配属先は巴拉ナ州北部の都市、マリンガ地区日本語学校連合会。8~10校の教員に対して研修や訪問指導を行い、さまざまな行事やイベントもサポートする。

「今まで日系ブラジル人の先生に教わったため、日本から来た先生ということでおどろいていました。でも、いちばん子どもたちには興味を持つてもらえました。コロンビアや豊橋で外国语の児童を教えた経験もあり、授業は好評でしたね。また、なかなか学校に馴染めない生徒に、他の先生とも相談しながら成長を支えた。すると態度が徐々に変化してきたという。その生徒が一生の宝物だ。



日系社会シニア・ボランティア  
平成24年度派遣

## 櫻井 美香

Mika Sakurai

大学院で国際協力を研究。アメリカの小学校で1年、日系社会青年ボランティアとしてコロンビアで2年、日本語を教えた経験を持つ。中学校の国際学級担当を経て、ブラジルで活動。



JICAボランティアでの体験は、  
自分を再発見する大きなチャンス。  
「この国で苦労した体験が、帰国してすぐ役に立つのでは?と今は思っています。」



「そうすると、当初の私の見方とは違う意外なことが見えてきたりしたんですね。また、苦しい時には真の意味での『助けてくれる人』を見極める力がついてきます。困っている私に温かく接してくれた人たちのことは、決して忘れないでしょうね。」

日本のように仕事中心でなく、家族や友人ととの交流の時間を大切にする国だからこそ気付いたこともある。知識として



# 世界のいろいろな 価値観を伝え、 広い視野を持つた

子どもたちを  
育てていきたい。



のぞいてみよう! JICAボランティア JICAなら安心!

## 現地でのJICAの 支援体制は?

着任後1ヶ月の語学研修、ホームステイプログラムのおかげで、現地に徐々に慣れていくことができました。また、安全、健康面でのサポートもしていただけて安心です。



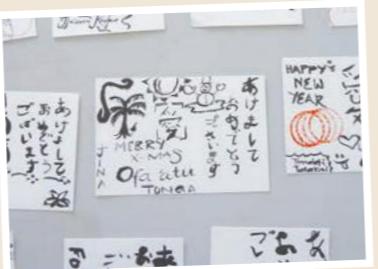
## 実際に支援によって 助かったことは?

夜中に体調が悪くなつて動きが取れなかつたとき、JICA事務所の方に連絡したところ、すぐに現地顧問医のいる病院に運んでくださいました。



## 前任者から引き継いで 役立つことは?

活動で必要なことが丁寧にまとめられた冊子を前任者からいただきました。おかげでスムーズに活動を始めることができました。



「高校生の時、日本語を習つたよ!」  
街を歩いていると、声をかけてくる人がたくさんいる。これまでの活動がトンガの中にも根付いているな」と実感できる瞬間だ。  
「国際協力に関わつていくことは、人と人との繋がりの中で、それぞれの立場を尊重しながらともに作り上げ、ともに成長していくことだと改めて感じています。何事も一人ではできない、多くの人の支えがあつて自分が活動できている。協力隊の方々、派遣前の研修や訓練で出会つた仲間、現地でともに活動する協力隊員や、同僚のトンガ人、生徒たち。そして、道

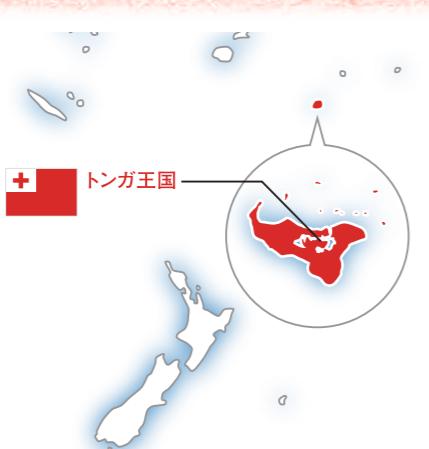
## 自分の経験を語り、子どもたちが 国際社会へ羽ばたく足掛かりに。

「高校生の時、日本語を習つたよ!」  
街を歩いていると、声をかけてくる人がたくさんいる。これまでの活動がトンガの中にも根付いているな」と実感できる瞬間だ。  
「国際協力に関わつていくことは、人と人との繋がりの中で、それぞれの立場を尊重しながらともに作り上げ、ともに成長していくことだと改めて感じています。何事も一人ではできない、多くの人の支えがあつて自分が活動できている。協力隊の方々、派遣前の研修や訓練で出会つた仲間、現地でともに活動する協力隊員や、同僚のトンガ人、生徒たち。そして、道



青年海外協力隊  
平成25年度1次隊  
**鈴木 千咲**  
Chisaki Suzuki

愛知県にある中学校の英語教師。大学で副専攻として日本語教育を学びながら、留学生にボランティアで日本語を教える。その経験を活かし、現職教員特別参加制度(P.29Q&A参照)で青年海外協力隊に参加。



り体験などいろいろと試しました。なかでも、前任の方とトンガ人の先生が考えた日本語劇『シンデレラ』は、とても盛り上がりましたね。苦労しただけに、無事開催できた時の達成感は大きかったです。何でもなんぴりで忘れっぽい、トンガというお国柄。練習が予定通り進まず、焦つて悩んだこともあった。そんなとき、「大丈夫よ、あなたならきっとできるから」と励ましてくれたのも、やはりのんびり、どっしり構えるトンガ人。今は常に、「現地の人と同じ目線に立つこと」という研修中に、大切な現地の生活の中心に、自分の身を置くことを考えている。



「高校生の時、日本語を習つたよ!」街を歩いていると、声をかけてくる人がたくさんいる。これまでの活動がトンガの中にも根付いているな」と実感できる瞬間だ。

「国際協力に関わつていくことは、人と人との繋がりの中で、それぞれの立場を尊重しながらともに作り上げ、ともに成長していくことだと改めて感じています。何事も一人ではできない、多くの人の支えがあつて自分が活動できている。協力隊の方々、派遣前の研修や訓練で出会つた仲間、現地でともに活動する協力隊員や、同僚のトンガ人、生徒たち。そして、道

国際協力を目指す生徒の夢、  
その後押しをしたい。

「世界の現状を子どもたちにもうと知つほしい。日本と世界の子どもをつなぎたい。中学の頃から国際協力に興味を持ち、大学では海外ボランティアも体験していた

ことで、まず中学校の英語教員という道を選んだ。協力隊への参加も、以前から考えていたことだ。しかし、なかなか決心できず、生徒の受験対策に追われていた時のこと。

「人の生徒に、『夢は国際協力に関わること。青年海外協力隊になつて世界の役に立ちたいです』と言われ、はつとしました。ためらつてる場合じゃないと思いました。」

鈴木さんはすぐさま協力隊に応募。帰国後に職場復帰できる「現職教員特別参加制度」を利用して、トンガに赴任。

「生徒に身近な私が、国際協力の一つの道を示し、彼らの夢の後押しができたら。あの生徒の、未来に向かう力強い言が、鈴木さんの背中を押していた。」

「生徒に身近な私が、国際協力の一つの道を示し、彼らの夢の後押しができたら。あの生徒の、未来に向かう力強い言が、鈴木さんの背中を押していた。」

日本が大好きな生徒たち、彼らの成長を見るのが大きな喜び。

日本が大好きな生徒たち、彼らの成長を見るのが大きな喜び。

配属先のトンガ高校は、生徒数約1200人。トンガでも優秀な生徒が集まる公立高校だ。日本語は選択科目の「つとしで開講され、現在約80人、5学年の生徒が学ぶ。協力隊によるトンガの日本語教育は20年以上続き、トンガ人の日本語教師が実際に育っている。日本人を中心からトンガ人中の日本語教育への移行を目指した活動も行われている。生徒も日本人に慣れていて、

端で出会う人たちも。本当に多くの人が関わりの中で生きている。

「帰国後は、日本の生徒たちにトンガでの様子を話し、いろいろな価値観、世界を伝えていきたいと思っています。その中から一人でも、広い視野、国際的な視野を持つて社会に貢献したい、と考える生徒が現れたらいいですね。これから参加される方には、少しくらい不安があつてもぜひ歩き踏み出してほしいと思います。必ずできることがありますから。何事もやってみなければ始まらないですからね。」

鈴木さんは今から、次の大きな夢に胸を膨らませている。



「日本の歌やスポーツ、運動会、着付けや寿司づくり企画した。

現地の人と同じ目線で、  
どつしり構えて悩みを乗り越える。





# 60歳を過ぎてからの心機一転。

## 『草の根の外交官』

として、人と人、国と国をつなぐ役割を。

パプアニューギニア

のぞいてみよう! JICAボランティア

生徒たちの、日本語・興味津々!

### まご孫はやさしい

初授業の自己紹介で年齢を言うと学生たちは、とても60歳を過ぎているように見えないと驚いてくれました。パプアニューギニアでは、何でも腹一杯食べるのが習慣。中年過ぎにはほとんどの人が、何らかの生活習慣病を患っています。そこで、「孫はやさしい=マ(豆)ゴ(胡麻)ワ(ワカメ・海草)ヤ(野菜)サ(魚)シ(シイタケ・茸)イ(芋)」を万遍なく腹八分で摂取すれば、健康で長生きできる、と教えたたら、学生たちも興味津々でした。



日本語教師として海外へ。  
60歳を過ぎてからの新たな挑戦。

気候の良いところとも言われる高原の都市、ゴロカ市。人口は約3万人。そこは鈴木さんにとって、希望通りの任地だった。

「1年中、夏の軽井沢のような気候です。ニーギニア高地人と聞くと、弓矢で武装したような人を連想するかもしれません。が、根は温厚な農耕民族。高原野菜なども育ちやすい土地柄で、ゴロカの人たちはいつも木陰でのんびり過ごしていますね。」

鈴木さんは、ボリビアへ行って教えるということでした。他にも中国の大連で時折出張授業を行うという自分より年嵩の男性もいて、大いに啓発されましたね。すぐさまTOEICを受験し、シニア海外ボランティアの募集に願書を出しました。

しかし、不安もあった。日本語教師としての勤務経験がなかったこと。また健康面でも、高血圧などの薬を飲んでいた。

「任務に耐えられない体なら合格できないだろうし、もともと経験不足だから、受かつたら儲けものと考えていました。」

応募に際して、まずは養成講座時代のテキストを復習。TOEICは幸い基準点に達したが、錆びついていた英語もブラッシュアップ。60歳を過ぎてからの新たな挑戦だった。

「価値観がまるで異なる別世界、今ではこの街が大好きに。」

パプアニューギニア独立国首都、ポートモレスビーから北西へ400km。「世界一

学生数は少なかつたという。

「前期が11人、後期は大学紛争が勃発してしまい、わずか5人。授業で日本紹介のDVDを見せたり、習字や箸の使い方などを教えたり。掲示板に、課外活動としての将棋や折り紙教室の案内を出しましたが、学生の反応は散発的でした。」

教材にも



苦労した。  
日本語に  
ローマ字・  
英語が併記  
された教科  
書しかな  
く、学生は  
どうしても

目の向いてしまうのだ。「後期からは、自分で持参した日本語だけの教科書で授業を行いました。翻訳に手間取りましたが、効果は上がりましたね。」

近々、JICAの支援制度を利用して購入した教科書が届く。今までの授業準備の負担も軽くなるだろう。日本語教師としての本格的な活動はこれからだ。

鈴木さんは自身にも大きな変化があった。一時帰国で受けた健康診断では、すべての数値が改善していたという。

「海外でのボランティア活動は、私にとってまさに心機一転のいい機会でした。まるで現職の頃に戻ったような気分です。残りの1年も『草の根の外交官』としての意識を持つ、学生やスタッフだけでなく、いろんな人たちとの交流を深めていきたいですね。」

バイタリティあふれる鈴木さんのような人と現地の人々との交流が、新たな国際関係を創っていくに違いない。

鈴木さんは「草の根の外交官」としての日本語コースを担当。ここでは1年以上も日本語教師が不在で、日本語を履修した学生も卒業していましたため、

日本語教師不在のブランクを、  
自分なりの工夫で克服。



赴任して1年、経験も学生数もまだ少ないが、心に残る出来事は多い。

「クラスの学生が、『ビルム』というこの国独特の手編みバッグをプレゼントしてくれたり、見よう見まねで作った未完成の折鶴を持つて教えを乞いに来てくれたり。少しずつお互いの信頼感が生まれてきていい

さまざまの人との交流で、『草の根の外交官』としての役割を。



シニア海外ボランティア  
平成24年度3次隊

**鈴木 馨**

Kaoru Suzuki

一般企業を退職後、多摩市国際交流センターにおいて3年間ボランティアで日本語を教える。シニア海外ボランティアとして、パプアニューギニアのゴロカ大学で活動。



パプアニューギニア独立国

## JICAナレッジサイト(日本語教育分野)で 派遣実績と帰国後の進路をご紹介しています。

1965年に青年海外協力隊の初代日本語教師がラオスに派遣されて以来、延べ68カ国に3,635名のJICA日本語教育ボランティアが派遣されており、現在133名のJICA日本語教育ボランティアが各国で活動しています。(2015年10月1日時点の数字で、延べ人數には派遣中人數を含みます。)

JICAナレッジサイト(日本語教育分野)では、JICA日本語教育ボランティアの派遣実績をはじめ、募集期ごとの応募・合格状況、各国の配属先情報などを公開しています。

ボランティア活動を終えた後、国内外で日本語教育を続ける人、一般企業に勤める人、公立学校等で教職に就く人など、帰国後の進路は様々です。

なお、2010年に青年海外協力隊日本語教師及び日系社会青年ボランティア日本語学校教師を対象に帰国後の状況調査が実施されました。(下図参照)

詳しい結果等につきましては、右記サイトで公開されておりますので、そちらもご覧ください。

**日本語教育**

日本語教育分野における活動のご案内

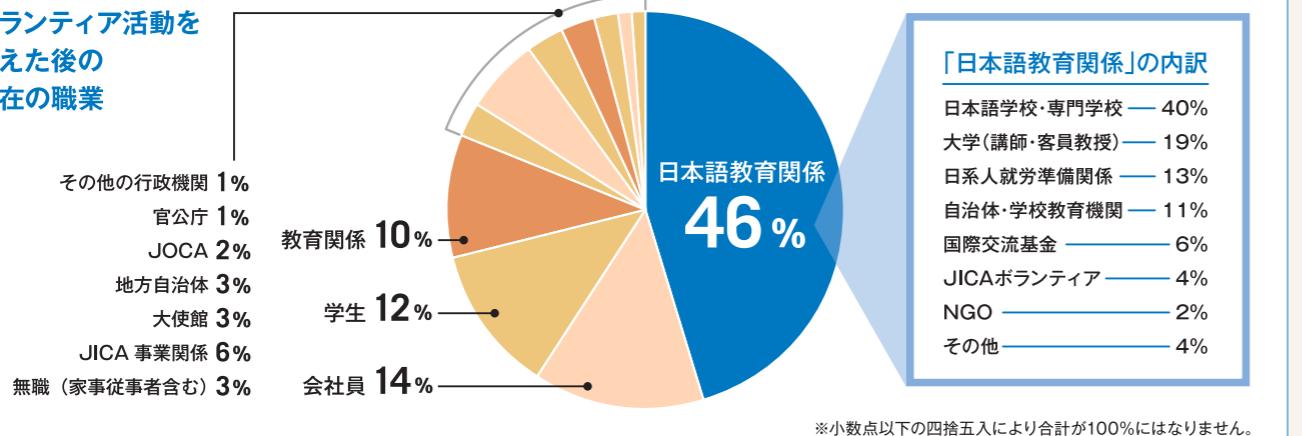
【JICAの日本語教育分野の協力メニュー】

【日本センター】

【語学訓練】

【全体講義】

JICAナレッジサイト: <http://gwweb.jica.go.jp/km/FSubject2301.nsf/>



### ひとくちメモ：余暇の過ごし方編

●せっかく南の島に住んでいるのだから、海を楽しむなければもったいない！ということで、ほぼ毎週サンゴ礁の青い海に通っています。おかげでストレスか

## JICAボランティアに対する JICAの支援制度を一部ご紹介します。

JICAでは、派遣前、派遣中、そして派遣後に、以下のような支援を行っています。

受入機関での協力活動で必要とされる実務的な技術・技能などの向上を図ることを目的とした研修です。原則、青年海外協力隊及び日系社会青年ボランティアが対象です。期間、場所は適宜指定されます。

### 派遣前

#### 技術補完研修



青年海外協力隊及び日系社会青年ボランティアは70日間、シニア海外ボランティア及び日系シニアボランティアは35日間の合宿制の訓練です。二本松(福島)、駒ヶ根(長野)の訓練所などで、現地で必要な語学学習を中心、JICAボランティアとして必要な知識(ボランティア事業、異文化理解、安全管理、健康管理など)を学びます。

### 派遣前訓練

#### 派遣前訓練



青年海外協力隊事務局に在籍する日本語教育分野の専門家(技術顧問)に活動に関する助言や指導を求めることがあります。各在外事務所に健康管理員(日本の看護師免許取得者)を配置し、健康相談、病気・医療情報の提供などを行っています。

**派遣後**

**派遣後 教育訓練手当**

帰国後に、さらなる技術・技能の修得または免許・資格の取得につながる教育訓練、進学に対して、JICAが支援する制度です。日本語教育ボランティアでは、大学院進学での利用が多いです。詳細はWEBサイト「JICAボランティア 教育訓練手当」をご覧ください。

### 派遣中

#### 活動支援

青年海外協力隊事務局に在籍する日本語

教育分野の専門家(技術顧問)に活動に関する助言や指導を求めることがあります。





### 太原 徹雄

青年海外協力隊  
平成19年度4次隊  
インドネシア・マナド国立工科短期大学で日本語や教授法の指導などを行う。帰国後、横浜国立大学大学院に進み、非母語話者日本語教師の教育実践について研究中。

ですが、送り出す側としては、実はそういう効果があるということも知つてほしいですね。

■宮越 確かに、私がいた地域には日本人がいなかつたので、住んでいること自体に意味があつたのかなと思っています。そこで生活して、町の人と話して買い物をし、「本物の日本人ってこんな感じなんだ、普通の人なんだ」とわかつてもらえる。それだけでも意味があつたのだと思います。

■佐久間 まさに、実はそこにあるということだけでも価値があるんです。「任地で試行錯誤の連続で、何も大したことができないなかつた」と思つても、その隊員が帰国して2年後、3年後に私たちが出張などで行つてみると、「あの青年のことは決して忘れない」と言つて、活動中は気づかなかつた成果が見えてくることもあるんです。これから行く人には、そういうことを伝えていきたいですね。

### 木村 佳代子

青年海外協力隊  
平成21年度2次隊  
タイ・カンチャナスック高校で、日本語の授業や日本文化紹介イベントを企画。タイ人教師の日本語力向上にも協力。現在は広島にある福山国際外語学院で専任教員として勤務。



日本人として現地で暮らす。  
それだけでも大きな価値がある。

佐久間先生は日本語教育ボランティアを支援する立場として、どのような心構えで赴いてほしいと思われますか。

■佐久間 そうですね。例えば、偉い人がその国へ行つて講演したとしても、JICAボランティアのような交流は絶対にできないところが、たった一人の青年が、2年間そこで活動し、共に暮らすことで現地に変化をもたらすことはあるんですね。これはJICAボランティアすべてにいえることだと思います。

赴任当初はそこまでなかなか考えられないん

協力隊にはいろんな個性や職種の方がいらっしゃいます。そういう方たちとの出会いを通して、いろんな体験や知識を得られたこともあります。

■木村 私は派遣前訓練で2ヵ月タイ語を学んだだけで、赴任当初はほとんど会話が通じませんでした。でも、「言葉」というのはそれほど大切ではないかもしれない、と住んでみて思いました。言葉が通じなくて「コミュニケーション」はできる、と感じる場面がいろいろあつたんです。今は日本で外国人に日本語を教えていますが、学生が言葉に詰まつても待つてあ

げられますね。言葉がなくても「コミュニケーション」はできるということがわかっているので、焦らずどうすれば相手と「コミュニケーション」ができるかを考えることができます。

■宮越 私は中国に対する印象が深まりました。中国人の友人もできて話をしているうちに、中国のいい面もたくさん見ることができました。例えば、バスに乗つていると中国の若者は日本の若者より席を譲りますし、年配の人も元気な気がします。報道でしか知らない中国に住んでみて、面白さがわかりましたね。帰国後は中国人に限らず、地域の外国人と交流する機会を作つたり、遊んだりしています。そういう意味でも、自分自身の成長に繋がっていると思います。

■太原 青年海外協力隊として参加する前は、一教員として日本語を教えることだけを考えていました。しかし、協力隊ではいろんなイベントを企画したり、言葉を教える以外の活動も多くありました。コミュニケーションスキルや情報収集というのが、海外では特に重要になつきますが、それを実感することができました。時には成功し、時には失敗を繰り返しながら、自分自身スキルが上がつたかなと思います。それが、自分が得た一番大きなことです。

■佐久間 協力隊に参加しての変化でも、期待通りの変化と、それ以上の予想外の変化があると思うんですよ。例えば先ほど、木村さんの言つた、「言葉を超えたコミュニケーション」、というのは、想定外の得たものだと思つています。それが、自分が得た一番大きなことです。

■宮越 私も考へてはいたのですが、帰国後の進路は苦労しましたね。今は就職して一般企業で営業職をしています。帰国した時は、大学職員になりたいと思っていくつか受けました。小・中学校で外国人児童へ日本語指導を行うというもので、去年までそこで働いていました。

■木村 私はJICAの進路支援制度を利用して、日本語教育関係の仕事を見つけました。木村さんと太原さんは、現在も日本語教育に携わっていますね。

■木村 今は広島県の日本語学校で働いています。もつと日本語教師を続けたいと思い、国内で探していたところ、運よく今の学校に専任で採用していただきました。

■木村 帰国する時には何も考えていませんでしたが、たまたま東ティモールで日本語教師短期ボランティアの募集があって、印度ネシア語が話せることが条件だったので応募しました。その後、JICAの進路相談カウンセラーに相談し、しばらく臨時で小学校教員をしていたのですが、自分がやつてきたことの総括として日本語教育に関する研究をしたいと思い、家族の許しを得て大学院に進学したんです。

■佐久間 日本では普通の青年が、任地に行くと周りから愛され、信頼され、100%以上上の力を発揮するんです。そして、帰つてた時のあの表情の変化を見るのがどれほど楽しかった! その人としての成長を見るために、これからも携わつていただきたいと思っています。

■鈴木 赴任する前は、パラグアイ人は時間を使らないとか、いろいろ聞いていたんですけど、やはり先入観は持たないほうがいいなと思いました。確かに國柄はありますが、一人ひとり接していく上で個性を大事にして接していくなければ、という点に気がつきました。また、

### JICAボランティアで得た貴重な経験が、自分自身を大きく変えた。

JICAボランティアに参加する前と参加後では、自分自身に何か変化はありましたか?

■鈴木 赴任する前は、パラグアイ人は時間を使つてみると、そういう人ばかりではなくて。やはり先入観は持たないほうがいいなと思いました。確かに國柄はありますが、一人ひとり接していく上で個性を大事にして接していくなければ、という点に気がつきました。また、

### 宮越 正史

青年海外協力隊  
平成19年度4次隊  
中国・三峡大学において、日本語指導及び日本文化紹介イベントを実施。現在はガスメーター等の製造・販売を行う(株)シナガワの営業職として、海外案件にも幅広く対応。



### 鈴木 宏子

日系社会青年ボランティア  
平成19年度派遣  
パラグアイの日本文化協会「ラ・コルメナ日本語学校」にて、日系人やパラグアイ人児童に日本語の指導や学校行事の運営などをを行う。帰国後は東京の中学校で英語教師に。

■宮越 自分が外国人になる経験つて、行って住んでみないとわからないもの。それを体験することで、いろんなモノの見方や感覚が変わつくると思います。

■太原 JICAボランティアは、やりようによつては国政レベルにまで自分の考えを伝えることもできるんです。いくらでも自分試しのできる素晴らしい場だと思つますね。それでもうひとつは、第一の故郷ができるということ。帰国したJICAボランティアはみんな、再び任地に行くことを「里帰り」すると言つてらるいです。日本語教育だけに固執した活動ではなく、日本語教育を通じてその国を支援したり、国際交流を行うということを意識してほしいですね。

# JICA日本語教育ボランティア Q & A

## JICA日本語教育ボランティアに応募するための条件は何ですか。

JICA日本語教育ボランティアでは、ほぼすべての派遣先において「日本語教育に関する資格保持」を条件としています。ここでの資格とは、「420時間程度の日本語教師養成講座」「大学または大学院の日本語教育主専攻・副専攻」「日本語教育能力検定試験」で扱う内容に相当します。派遣先によっては、その他の条件が加わることがあります。

## 日本語教育について

### まったく知識がないのですが、応募できますか。

応募は可能ですが、A1で述べたとおり「日本語教育に関する資格保持」を条件の一つとしていますので、日本語教育に関する知識・技能を得てからのご応募をお勧めします。

## 日本語教師として働いたことがないのですが、実務経験は絶対必要ですか。

実務経験がなくても応募は可能です。派遣先が実務経験を条件としていることもあります。しかし、JICA日本語教育ボランティアは即戦力として学校などで日本語の授業を行うことが求められる派遣先がほとんどですので、クラス形式での授業を経験しておくことをお勧めします。派遣先で求められる経験年数については、WEBサイト「JICAボランティア 要請情報検索」をご確認ください。

## どこで日本語教師としての経験を積むことができますか。

日本語学校等で日本語教師として働くほかに、自治体の国際交流協会等が実施している日本語教室で日本語を教えるボランティアを募集していることもありますので、そちらで経験を積むのも方法の一つです。

## 派遣先ではボランティア一人で日本語を教えるのですか。

現地の同僚教師がいる場合もありますし、一人で教える場合もあります。配属先によって異なりますので、詳細はWEBサイト「JICAボランティア 要請情報検索」をご覧ください。

## 現在何名のJICA日本語教育ボランティアが派遣されていますか。

WEBサイト「JICAナレッジサイト」の日本語教育分野で、年2回(4月／10月) 日本語教育ボランティアの累計及び派遣中人数を公開しています。

## JICA日本語教育ボランティアが現地でどんな活動をしているのか知りたいのですが。

WEBサイト「JICA世界HOTアンダル」及びFacebookページ「JICA日本語教育ボランティア」で派遣中ボランティアの活動の様子がご覧いただけます。